慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	遊女と地おんな : 近世文学の女性観
Sub Title	Japanese literature
Author	檜谷, 昭彦(Hinotani, Teruhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1965
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.19, (1965. 1) ,p.2- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 文学・ 芸術に現われたる女性像
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00190001-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

遊女と地おんな

――近世文学の女性観――

檜谷昭彦

一

為永春水の「春色梅児誉美」四篇巻之一二（天保四年一八三三刊）には、花魁此糸の不遇の佗しさを敍して、山の宿に判人蔭八が女房のお民とともに親切をつくす条がある。その蔭八の話のなかに左の如き文章がある。

かげ八「イエモシ、おいらん達や娘子どもの了簡じやア、はやく思ふ男と一所になつて、とき〴〵はすねたり喧嘩をしたら、さぞたのしみだろうなんぞと思ふのが、世間のあたりめへでごぜへますが、サアそうなつて子どもでも出来てごろうじろ。立派にくらす御新造さんでも、色気も恋情（こひけ）もさめてしまつて、エあれがかと見違へられるやうになりますぜ。いはんや貧乏世帯をもってごろうじまし。昨日まで町内の若衆が血道を上てさわいだ娘でも、直に大腹を抱て味噌こしを袖に、右の袂へ焼芋の八文も買て歩行やうになると、まだ嶋田でゐられたものをなんぞと、後悔して泣のがいツくらも有ますぜ。しかし今の娘は親のしつけがわりいから、はやく亭

主をもって子どもでも生産のを、恥かしいとは思はねへで、手がらのやうに思つてゐます。イヤそれから見ると女郎衆はマア十人が九人、めつたに小児は産ねへから、通人は兎角、おいらん達を引ずり込たがりますぜ。

これは此糸が蔭八とお民の軽い争いを聞いて、はやく自分も夫婦喧嘩がしてみたいという言葉に次いで語られる一節であるが、此処には嫁入した女が色香も失せて見違える程醜くなることが、娘たちの憧憬に反して嫁入後の苦労の並でないことを下敷にして説かれているのである。これは作者のいわゆる教訓（狂訓）であつて人情本の常套と考えればそれ迄だろう。しかしその次に春水は当世娘が早く亭主を持ち子を産むことをむしろ手がらのように思つていると書き、「それから見ると女郎衆はマア十人が九人、めったに小児は産ねへから、通人は兎角、おいらん達を引ずり込たがる」と蔭八に言わせているのだ。通人は分知りの謂である。こと細かな考証は置くとしてここでは恋を愉しむ粋人の意としてよい。子を産むことが美の衰退につながるならば、通人は遊女を妻妾として地女を捨てるというのである。「嗟傾城に実なしとは、板橋雑記の情にわたらず。女郎の終身はとりきまらずして、たとへ三十才の上はこすとも、たゞあどけなく花やかに、わけのないのが花にして、折々の風情あるが真の契情のこゝろにして、素人の操を守ると、日を同じふしていふべからず。」（後篇巻之六、天保三年刊）という遊女への弁護もそれに関わっている。

直「イエ〳〵それはモウ今流行中形絵本とやらにも幾等も綴てある事で、お屋しきに居た時分から読で知つて居ますョ。また其本の中の男は一人で、情人女の三人か二人もつて居ないのはなし、女は情人女同志和合して姉妹の様に睦ましくして、男一人へ貞実をつくすものとをしへてあるから、絵本の通りに操とやらを守つて、嫉妬をせずにくらしたら、始終悪くは有まいと思って居ますは。（「春暁八幡佳年四篇巻之一」天保九年刊）

このような「狂訓」的言辞、「事と時と場における人間心境に相応した心の持方」（岩波古典大系本「梅児誉美」解説、中村幸彦氏）の敍述にも、女性を、殊に花柳の巷の婦女子を読者として意識している作者の態度がうかがわれる。それと同時に玄人女を市井の女の

上位に置こうとする作者の美意識は、女の美を男の側からのみ眺め商量したものとする事を許さぬ一般的風潮に依拠したものであつたとも考えられよう。「されど月夜にぞっとする、素顔の意気な中年増」（梅児誉美初篇巻之二）という意気な女とは所詮地女に望むべくもない美の複合体である。九鬼周造の「『いき』の構造」についてみれば、

1　異性に対する「媚態」である。いきごとはつまりいろごとである。

2　意気は即ち意気地である。

3　それは諦めであり垢抜のしたすつきりと瀟洒な心である。

という。九鬼氏の考察には「すい」と「つう」との関連、検討に欠ける所がある。三者に基調として流れる「分知り」の男女の仲らいが生む「いろ」の分析が不足している。「すい」から「つう」へそして「いき」にと遷る美意識には、概念上の相違はみられても、基盤となる美的理念に一つの共通した観念がある筈である。とまれ「いき」とは遊女の世界に求められ、地女に求め得ぬ洗練された心情の複合美であろう。いま、遊女と地女を問題とするにあたってまず次の文章を引くことにしよう。「春色梅児誉美をめぐつて」なる神保五弥氏の論文は次のように遊女の美を述べられている。

「春色梅児誉美」の各篇巻頭の口絵には、作中に登場する女性の絵姿を載せている。娘義太夫竹蝶吉であり、深川の芸者米八、仇吉であり、また吉原の花魁此糸であり、女髪結梅の小由である。（中略）こうした事実は、作者、書肆ともに、読者たる女性が、玄人の女性の姿絵を口絵に置くことを歓迎すると知つて行つたことである。ということは、彼女らが、道徳的に玄人の女性を非難するよりも、彼女らの髪風、化粧、服装などに美を見出し、惹かれていたことを示すものであろう。（中略）町家の女性が、彼女らの社会に受けいれられるものとして見出す美は、その最高のものを、この時代は玄人の女性が占めていたわけである。玄人の女性美が、そのままいつぱんの女性美をリードしていたのである。

神保氏の御説については大略従うにやぶさかではない。ただ上記の氏の断定についてはいくらかの点でこれに注記が必要である。そ

れは如上の美意識・美的価値観が、単に天保度に於けるばかりでなく、すでにその前代から、更には元禄期上方文学の作品の中に認められ得るものであつたという点であり、しかもそうした傾向があらわれるに至る背景としては、遊女や地女の美の描写とは別に、当代の読者の知識にうつたえて女性美を印象づけようとする類型的な描写方法が一方にあつたという事、この二点が、何程かの検討を要するからである。以下こうした問題に留意しながら女性美の描写の変遷を辿つてみることにする。

二

室町末期から近世初頭にかけての散文作品には、美人を形容する描写にいくつかのきまつた型が約束されていた。所謂「物揃」などがそれである。例を仮名草子「恨之介」にとろう。これは恨之介の思いびと雪の前の形容に当る条であるが、まず雪の前の姿の描写は次のようである。

その中にとりても琴をしらべてをはします上臈の御姿を見てあれば、年来ならば十五か六と見え給ふが、紅のちしほの袴をふみしだへ、肌には何をかめされけん、うへには白き綸子にいろいろの絲をもつて物の上手が縫ふたりけり。御上前のくだりには、恋をするがの富士のねを、浮雲が帯となり、解かんとすれば結びもなく、けふりは空に横折れて風になびき、富士のたかねの雪消へやらで、裾のばしける山なれば、紅葉ふみわけ鳴く鹿の妻問う声にあはれ増す。さて御かたよりうしろには、羽衣の松みどりにて、よはひは君がためしかや。さて又裾の蹴廻しには、浮島が原田子の浦あまの釣舟ほの見ゆる、磯うつ浪のはげしくて、涙ただよふ浜千鳥、げにありありと縫はれける。さて帯の結構には、御きんのあやに摺箔し、そのあひあひに秋の野に草づくし縫ふたる、翡翠のかんざしはあたとたをやかにして、楊柳の風になびくがごとし。桂の眉は青ふして、せいたいが立板に水を流すにことならず。宛転たりし双蛾は、叡山の月にあひ同じ。また鶯舌のさへづりは、露をふくめる絲萩の、かごとばかりに咲きそむる、花よりもなをいつくしや。袖うちはらふ雪の下、紅顔きんせうのよそをい、花鳥が絵にはうつすとも筆にはいかで及ぶべき。

これは衣裳の描写である。雪の前というひとりの美姫がどのような衣裳をまとつて居たかを縷々として畳々と説いているのだ。すがたかたちの結構を敍すことよりも、その衣裳を徴に入り細をうがつて説くことにより多くの、いやむしろすべての努力がはらわれているといえる。こうした敍述の方法は「美人揃」と一連のものであつて両者が相俟つて美女の修辞を形成していると言い得よう。前記の文にすぐ続いて「物揃」の一つである「美人揃」の修辞があるのだが、その形容の変遷は「恨之介」の諸本の比較によつてすでに明らかな通り、その登場人物には大はばな増減が可能なものであり、後期のものほど分量が多くなつて来ている。たとえば、

物によくよくたとふれば、唐の楊貴妃まやぶにん、ぐし君りふじん星の宮、越の西施あしゆくぶにん、漢のちうたん御すいでん、毘沙門の妹に吉祥天、朧月夜の内侍のかみ、染殿の御きさき、かの野宮にすみ給ふ御息所に葵の上、和泉式部小式部、紫式部に小督の局、紀の有常がむすめかや、義経のおもひしは、静御前や浄瑠璃姫、その行平の中納言三年をちぎる松風や、をなじく村雨、妓王妓女、用明天王の心をつくさせたまひけるまの殿のひとりひめ、さて在五中将のしのびたまひし二条の后、曽我の十郎祐成がちぎりをこめし大磯の虎、宍戸の四郎が思ひける鬼女のをんな、阿波の鳴門にて其通盛をなげきつつ海にしづみし小宰相の局、無官の大夫敦盛の御室の御所にてみそめしより、しづ心なき恋にせしあんせむし(ママ)の大納言資賢の卿の御むすめ、げにや思ひは深草の四位の少将の心をかよひける小野の小町、班女玉虫玉藻の前、あやめまこもに常盤の前、奥州の庄司が子佐藤兄弟忠信とおなじよみじの安寿御前りきじゆ御前、さよひめ竜田の姫、仏御前に大職冠、江口の君に千手の前、雪姫ゆやの長とかや、鬼がむすめの十郎御前、ましほの卿の妹に、恋死のをんなこんよの姫に中将姫、をよそ源氏にみえけるは、桐壺帚木若紫、紅葉の賀花の宴、葵の上その榊木葉に花散里、須磨明石、澪標六十余帖のものとても、これにはいかでまさるべき。そうじて美人のその数は、十二人とは申せども、たとへばかぎりあるまじや。

以上長文の引用を敢てしたが、こうした美人揃は室町時代の物語や舞の本などから継承された作品技法の一つであつて、美人の名を数多く列記することによつて女主人公の美しさを強調し印象づけようとする方法と言つてよいだろう（「浄瑠璃物語研究」森武之助氏

参照)。それが殆どそのまま、このように近世初期の仮名草子には承け継がれているのである。ここに引用した「恨之介」では、雪の前の美しさは、彼女の身につけている衣裳の微細なまでの描写とともに、その美しさを比較すべき古今の名女の名を挙げることによつて表現されているのであつて、雪の前の美そのものを具体的に写しているのではない。例をもう一つ寛永九年(一六三二)の作とされる「薄雪物語」にとつてみよう。そこには薄雪姫の美しさはこう描かれている。

みな水晶の珠数をもち、たたずみ給ふ御姿、容顔美麗にて、霞ににほふ春の花、風にみだるる青柳の、絲春風にしたがふ風情、昔を聞きつたへしも、漢の李夫人楊貴妃、小野の小町の若盛り、女三の宮の立姿も、これにはいかでまさるべき、昔をとるにためしなし、たとひ絵にはうつすとも、筆にはいかでつくすべき。

つまりその形容は筆が顔かたちに及ぶにじた所で、「霞ににほ」い「風にみだ」れる、花や青柳の如くであり、それ以上の具象ではないのである。このことと、もうひとつ近世初期の仮名草子にあつては、美女の描写に遊女の姿は未だ明確に現われては居ないという点との二つをここでは注意して置くべきであろう。

三

「薄雪物語」は寛永九年の作である。それから三十年下つた寛文二年(一六六二)に板行された名所記風な仮名草子「ねごと草」はその筋立が「恨之介」や「薄雪物語」と全く類似している点で室町期物語の系統を引くものとしても差支えはない。野田寿雄氏は本書の解題でこのことに触れたあとでそれにも拘らず本書が有する新しい要素として次の三点を挙げておられる。一つは主人公が詠む俳句である。二に名所記風の叙述がある点、三に、遊女の名が美人の形容に登場して来ることである。主人公の余助が赤岩寺で見初めた姫君松風の容姿は左のようである。

柳さくらをこきまぜて、都ぞ春の錦とやらんにて、身をかぶりたる姫君の、伴人あまためしつれ、これも胡蝶の春の日に、花をしるべに来れるぞと見えて、みしよりも下りさせたまひ、四方の梢をながめやり、しづかにあゆませ給ふを見て、こはいかに、このあたりにかやうにやんごとなき上臈のあるべきともおもほへず。むかしの美人は申にをよばず。今の世にもてはやす、花の都におやまの君、武蔵の国に聞えてうつくしき、みめ吉原の勝山や、名をも吉田の御すがたを、たぐひあらじと聞きつたへしも、なかなかこれにはよもまさらじと、はや恋風の身にしみける。（傍線筆者）

「やんごとなき上臈」である姫君の美しさは「むかしの美人」を以てしても譬えるすべがない。そして「花の都のおやまの君」をひき明暦期の奴女郎として名高かつた丹前風呂出身の遊女勝山と、寛文期吉原の遊女吉田を以てその美の証とすることは、上流の貴婦人の美を推量する尺度に傾城の美を以てしたということになる。つまりここでは古典もしくはそれに類する貴婦人の美と遊女の美とが同列におかれている事実が見られるのである。延宝八年（一六八〇）刊の「元の木阿弥」には、

それよりしばし程をへて、三浦がうちの高尾の君、禿やり手が御伴にて、あたりほとりをかがやかし、悉皆弥陀の御来迎、ひと際すぐれて見えにけり。肌には緋むくの燃え立つに、上には白きちりめんに、紅葉の一葉を紅の絲にて縫わせたり。誠に紅葉はきさらぎの、花よりも濃き紅とはこれなんと、もくが心もうかうかして、踏む足元もたぢたぢとせし……。

とある。一読直ちに思い合わすのは物揃に於ける衣裳の描写である。ここにはその典型を「十二段草子」に求め得る物揃の方法が遊女高尾の衣裳の描写のなかに用いられているのである。それは前述の美人揃の変型が「ねごと草」に見出せるのと共に、室町期物語の女性美描写の一技法が遊女の修辞として用いられているとも言い得よう。この「元の木阿弥」刊行の翌年には「名女情くらべ」五巻五冊が出版される。これには日本文学の古典に登場するさまざまな女性の説話が収められているのだが、その第四巻迄は、衣通姫、小野小町、真野長者のひとり姫、京極の御息所、二条の后、伊勢の斎宮、紫式部等からはじめて、儀同三司母、赤染衛門、式子内親王、周

防内侍、和泉式部、鳥羽院の御后、源渡の妻、午王姫、更に横笛、小宰相、「高倉院の中宮にさふらはれける、局のめしつかひし上童」だつた葵の前、小督の局、匂当内侍に至る計二十八名の古今の名女の評判である。ところが本書の第五巻は上記のような名女とは異なつて遊女ばかりが七名集められ、収録されているのだ。ここには大磯の虎、京都六条の吉野、同島原の八千代、大阪の雲井、同夕霧、江戸の小紫、島原の吉野という実在の遊女が扱われているのである。

さて上に止事なき御かたゞをを、つらねたてまつりて、此巻にして、つたなきうかれ女のことわざまで、書加侍る事、猶ひとかたならぬ恐れなり。さて人のあざけりなきにしもあらじ。しかはあれども、此道は高賤へだてなく、心にかよふ道なれば、その品をかへり見ず、たゞひとすぢの実有情をしるべに書侍れば、（後略）

という本書第五巻冒頭の「後序」によつても弁解がましい口ぶりのなかに、歴史上の著名な女性に伍して、近世初期の遊女を取上げた作者—自ら好色軒と記している—の意識がうかがわれよう。ここにはすでに過去の名女よりも花やかな現実の生きた美女たちが美々しく装うて眼前にあつたのである。延宝年間といえば、もう遊女評判記の板行は盛である。延宝三年（一六七五）刊の「吉原大ざつしよ」には弐丁目松屋内の散茶女郎の藤江についてさえ次の如き讃辞を連ねている。

此君心静かにいとやはらかに、流石古の名も高き藤江といひし御の字の位なり、いとやはらかなる人あひ、又意気地の思はく振り、まことに二つとなきふしかなと思はるゝ、脊低き上に位を去るとかけり、愚かなる批判なり、

このことは「吉原天秤」（刊年不明、延宝初年刊カ）の太夫吉野の評中に、「なんにいわく、はなのしたのびすきて口もといやし」とか、「おもてにすこしあばたのあめるも月のかつらにひとしくいとしほらし」云々とあるのをも含めて、よきにつけあしきにつけ、女性美の典型を遊女に求め遊女のなかにのみ美の実態を見ようとした当代の傾向をうかがわせるに充分である。

つとめ十年ときわめて、傾城のならいにて、つとめのうちに身あがりすれば、そのあげ銭親方への借金とつもり、年季あきて此かねをたてねばいださぬなり。つとめのうち、衣装と朝夕の食物こそはおやかたよりいだせ、そのほかは皆自分まかなひなり。世にくるしきわざはまたとたぐひなかるべし。あわれむべし〳〵。（「人倫訓蒙図彙」巻七、元禄三年刊一六九〇）

こう書かれ事実公界（くがい）に沈湎する遊女たちが、その一方に於ては上記の如く、時代の美の旗手であつたことを認めねばなるまい。

評判記に描かれた遊女の美には生きた女性を実体として把えることに於て、古典の名女との比較商量を全く断ち切つた表現に於て、前代の物揃などと較べてはるかに生き生きとした現実感に裏打ちされている。やや時代は下るが隠士蝶郎の著である「吉原丸鑑」（享保五年刊一七二〇）は、

正徳五年に水あげありて太夫の位に備り給ふ。凡そこの廓の内の女郎三千第一の美人なれば、その貌形のすぐれ給ふ事は云はずとも知るべし。（中略）打えみ給ふとき唇を少し左の方へ寄する心にて、片顔にて笑顔をつくり給ふ癖あり、其笑顔をたとへて云はゞ東風温和の気をうけて南枝花始めて開くがごとし。そのかみ揚屋にてある客衆と口説し給ふ事ありしに、さばかりせき合て物争ひし給ふ面ざしたけ〴〵しき様は微塵もなく、御顔ばせ少し紅葉してその美しさ弥増也。その後あまりにせきかねて嬋娟たるまなじりに涙を浮べ給ふよそほひ、梨花一枝雨を帯びたる風情、かのもろこしの楊貴妃の位顔思ひやられぬ。

とある。九代目高尾の容姿を記したのであるが、唐山の名女をひきながらその形容が高尾の美そのものに見事に集約されている。以て当代の時勢粧を見るべきであろう。

四

それならば近世前期に於いて散文作品に表われる地女の表現はどうなのか。地女は遊女と比較してどう評価されていたのだろうか。それについては藤本箕山の「色道大鏡」（延宝六年成一六七八）に説くところを見るのが早道である。その巻一四雑女部第一妻女の篇には次のようにある。

抑々傾城の風俗のいたりてよろしきと、よのつねの女房の初心にて見ぐるしきとを、物にくらぶれば、黄金と青銅（しようどう）のかはりめあり。町方にてもたまさかに風身よく様子おもしろき女あれば、さても見られぬありさまや、悉皆傾城のごとくなるはそしれり、傾城の風儀あしきにおもひていふにはあらず、是も嫉妬の心より出たる過言なるへし。口にてばかりはそしれども、心中にはよしとおもへるにや、をよばずながら傾城のようすをまなぶ女粗ありと見ゆ。町かたにて道をたつる女の風義、町女房にはまさりたれど、傾国にくらべ見れば、又遥にその品をとれり。（中略）答云、傾城のすぐれたる道理は、ながれをたつるがゆへに、人のしのばるべき処を吟味せり。無量の品を改め糺して、よろしき事をきはめつくしたる物なり。されば初心にて見ぐるしき少年の女も、遊郭に入より先禿となづけて、傾城につかうまつる。此禿といはるゝより、けしき爽に躰りこうめき、髪のかゝり帯のまはしまで、あらたまれば、つらきむかしのかたちをうしなふ。此禿傾城に出世すれば、童すがた物ごとに又あらたまりて、むかしには百倍せり。かゝる作法に年月経て、其後退廓におもむく。廓にいまそかりし内は数にもあらざりし人も、町へ出しこれをみれば、立かへり見かへらるゝものなり。（下略、傍線筆者）

このように「色道大鏡」になると、遊女の美の絶対性が地女の前に提出されるのだ。さらに「悉皆傾城のごとくなるは」とそしる風評のゆくえは、「近年は人の嫁子もおとなしからずして、遊女かぶき者のなりさまを移し」（好色一代女巻一）とか、「おかたは我男ひとりに見る姿を遊女のごとく作り」（西鶴織留巻一）とか、「今時の女見るを見まねによく色姿に風俗をうつしける。都の呉服棚の奥さまといはるゝ程の人皆遊女に取違へる仕出しなり」（世間胸算用巻二）の如き風潮をやがて生む態のものであつた。これら西鶴の描いた風俗の流行は当代の女（元禄期の）が、容色の範を遊女に求めていたことを明らかにする。天和二年（一六八二）の「好色一代男」

巻六には延宝六年廿二才で死んだ新町の太夫夕霧の様子を左のように描いている（「名女情くらべ」の夕霧と同一人物である）。

地顔、素足の尋常。はづれゆたかに。ほそく。なり恰合。しとやかに。しゝのつて。眼ざしぬからず。物ごしよく。はだへ雪をあらそひ。床上手にして。名誉の好にて。命をとる所あつて。あかず酒飲て。哥に声よく。琴の弾手。三味線は得もの。一座のこなし。文づらけ高く。長ぶんの書て。物をもらはず。物を惜まず。情ふかくて。手くだの名人。是は誰が事と。申せば。五人一度に。夕霧より外に。日本広しと申せ共。此君〳〵と。口を揃えて誉ける。

この夕霧は「色道大鏡」によれば瞳が阿蘭陀人のように「どみたりけれど」、顔だちの美しさ押出しのよさがその難をかくすに余りあつたという。かくして西鶴の浮世草子に当世女の物好み、当時の女性の理想像が描かれるに至る。余りにも著名な「好色一代女」（貞享三年刊）巻一の文章は左のようである。

先年は十五より十八迄。当世貞はすこし丸く。色は薄花桜にして。面道具の四つふそくなく揃へて。目は細きを好まず。眉あつく。鼻の間せはしからず次第高に。口ちいさく。歯並あらあらとして白く。耳長みあつて縁あさく。身をはなれて根迄見へすき。額はわざとならずじねんのはへどまり。首筋立のびて。をくれなしの後髪。手の指はたよはく長みあつて爪薄く。足は八もん三分に定め。親指反てうらすきて。胴間つねの人よりながく、腰しまりて肉置たくましからず。尻付ゆたやかに。物腰衣裳つきよく、姿に位そなはり心立おとなしく。女に定まりし芸すぐれて万にくらからず。身に瘊子ひとつもなきをのぞみ。

こうした女は西鶴が「惣じて九所共に揃ふたる女は稀な」ものだとするその九所（足・手・目・口・頭・気・立容・色容・声）に亘つてととのつた女といえるだろう。以て当時の女性の理想的な姿態がうかがわれよう。

女性を見る視点はかくして主に官能の場に依存している。それは単に遊女を見る場合だけではない。もとよりその女性美は当初実用

的な立場から、特に評判記の場合は実用性という面からの評価が強かつたことは否めないが、それと同時に官能と結びついた女性の美の表現方式は浮世草子作者の常套であり通念であつた。西鶴の「世間胸算用」（元禄五年刊、一六九二）の巻二には、

せんぎして見るに、傾城と地女に別に替つた事もなけれども、第一気がどんで、物がくどふて、いやしひ所があつて、文の書やうが違ふて、酒の呑ぶりが下手で、哥うたふ事がならひで、衣裳つきが取ひろげて、立居があぶなふて、道中が腰がふらふらとして、床で味曽塩の事をいひ出して、始末で鼻紙一枚づゝつかふて、伽羅は飲ぐすりと覚へて、万に気のつまるばかり、髪かしらは大かた似たものといへば、同じ事にいふも愚かなり。

とある。更にまた一方では静御前・小野小町・和泉式部・井筒の女等を材にとり、その猥離な姿態を画いた「好色名女枕」（貞享三年刊）なども出板されていた時代の相がここにある。

それは好色の側から眺めた女性の美であり好悪の感覚である。その立場からの発言として浮世草子の女の描写は遊女を中心として表われることになる。これは一方に於て地女を美の範疇からながめる意識がなかつたことをも意味している。そしてこのことは、女性美それ自体が能う限り人工的に男の理想にそつて創られて行く事を示唆しているようである。

五

柳澤淇園はその著「ひとり寝」（享保一一年一七二六以後成）の上巻の六に己れの好みとする女の姿態をはげしい好悪の情の表白とともにこう書いた。

余が嫌ひのものを云はんに、顔の大きなる、もみあげのなき、はえ際の濃き、鼻の大きなる、唇の厚き、色の黒き、肥りたる、せいの高き、余り低きなる、物数高く云ふ女、手足の太き、大かたかくの如し、際墨など塗りし女を見ては、日に幾度か吐逆せしこと、

昔はありしなり、顔は成ほど一くらひも格別小さくして、色は成ほど白く、物腰やさしく、少しあどけなきやうにて、気軽くまめやかにやさしき女こそ、仙家の不老不死よりかはゆらしけれ。

この感覚的な女性の把え方は、同巻の八に「地女の笑ふさへ、美しいと云はるゝ娘にても、胸にこたへてうるさくなる」云々と記しているのを参看するとき、まさしく遊里の女をさしてのものであるに違いない。そうしてこの女性美の把握には遊女評判記や浮世草子のそれと何処に相違があるだろう。遊女を地女の上位におき遊女に十全の美を認めようとする態度には元禄期の感想と享保度のそれとの間に異質と認める何物もないと言える。一方地女の美を形容するにあたっては、

此女、田舎にはいかにして、都にも、素人女には見たる事なし、此まへ、嶋原に、上羽の蝶を紋所に付し太夫有しが、それに見増程成美形と、京の人の語ける。(「好色五人女」巻一、お夏の描写)

の如く、嶋原の太夫になぞらえてはじめて地女の美が可能となる表現を用いていることも考えねばならぬ。遊女の美を仲介とすることに於て地女の美が肯定されるのだ。美の基準はこうしてあくまでも遊女にあった。此処からやがて人情本の「狂訓」的言辞を生むべき美意識の理念化が芽生えても来る。それの考察は本稿の目的とするところではない。

最後に、遊女の美が白痴的な頽廃美ではなかったことの証として「色道大鏡」巻十七の扶桑列女伝から「八千代伝」の一節をひいて結びとする。

八千代諱尊子、姓藤原、波多野氏、寛永十二年乙亥五月朔日、生於播州姫路、(中略)(慶安二)年三月七日、郁子三笠、導之而再出世、補太夫天職、時年十五。改名号小太夫、其後亦改名而号八千代。重職如元。

自是其名充天下、威勢覆千世。巍然其徳芳。才智越万人、通達諸芸。其中能書、而為一流祖。(中略)又寛文三年癸卯春三月、

似空軒安静撰二鄙諺集一、尊子之句猶入二此集一矣、承応三年甲子春三月、発二起百人式首一、自レ洛呼二講談人一而聴レ之、同年六月、聴二伊勢物語一、明暦元年乙未春、聴二徒然草一。同三年丁酉春正月、聴二古今和歌集読方一、同年自二四月上浣一、聴二源氏物語一、翌年十月至レ読二幻巻一、講人病、故懈怠惜哉。其後依レ催二退郭義一、而不レ充レ志矣。（下略）